

## 6) ホンモロコの標識放流結果の概要

太田滋規・遠藤 誠・三枝 仁・藤岡康弘

### 【目的】

ホンモロコの漁獲量は昭和30年頃より150トンから300トン程度の間で安定していたが、この数年大幅に減少し、平成10年では29トンと激減している。これまでの増殖対策としては産卵繁殖場の造成やふ化仔魚の放流がされてきた。また、ホンモロコは種苗放流よりも増殖場の造成等による再生産の助長の方が有効であると考えられてきた。しかし、現段階のように激減すると天然の再生産では資源の枯渇が危惧される。そこで、稚魚放流の有効性を検討するため、冬期の沖曳網での再捕状況を調査した。

### 【方法】

平成11年7月1日に長命寺湾内の造成ヨシ帯に21千尾、牧増殖場内の表層に16千尾、同底層に22千尾、長命寺湾中央の表層に29千尾、同底層に24千尾のホンモロコ稚魚をそれぞれ相互識別可能なALC耳石標識をつけて放流した(表1)。

再捕調査は冬期に行われている沖曳網の漁獲魚を沿湖一円の漁業者から入手し、耳石標識により、放流群を分けた。

### 【結果】

再捕調査は平成11年11月21日から平成12年3月18日までに漁獲された2,918尾の標識を調査した。

調査した標本のうち長命寺湾に放流した標識魚は35尾再捕された。再捕率の高い放流群は牧増殖場内表層(0.073%)、長命寺湾中央底層(0.029%)、長命寺湾中央表層(0.024%)、牧増殖場内底層(0.023%)、長命寺造成ヨシ帯(0.019%)の順となった。底層放流の効果は夏の小型沖曳網調査の結果とは異なったが、放流地点別にみると長命寺造成ヨシ帯の再捕率は0.019%、牧増殖場内は0.045%、長命寺湾中央は0.026%と牧増殖場内が有効であった。

また、標識魚の再捕地点は図1のように北湖全域に広がっており、大規模な移動をしていることが明らかになった。

本年のホンモロコの漁獲は非常に少なく、標本の収集が困難であったため、標本数が少なく、再捕結果についてはさらに検討が必要である。

表1 ホンモロコ稚魚放流結果と再捕結果

| 放流場所     | 放流日      | 放 流 結 果 |         |             | 再 捕 結 果 |         |
|----------|----------|---------|---------|-------------|---------|---------|
|          |          | 放流時日齡   | 放流尾数(尾) | 放流時平均体長(mm) | 再捕尾数    | 再捕率(%)  |
| 長命寺造成ヨシ帯 | 1999/7/1 | 45      | 21000   | 14.35±2.620 | 4       | 0.01884 |
| 牧増殖場内表層  | 1999/7/1 | 45      | 16000   | 15.18±3.051 | 12      | 0.07303 |
| 牧増殖場内底層  | 1999/7/1 | 45      | 22000   | 15.09±3.470 | 5       | 0.02290 |
| 長命寺湾中央表層 | 1999/7/1 | 45      | 29000   | 15.10±3.304 | 7       | 0.02381 |
| 長命寺湾中央底層 | 1999/7/1 | 45      | 24000   | 14.53±2.863 | 7       | 0.02916 |

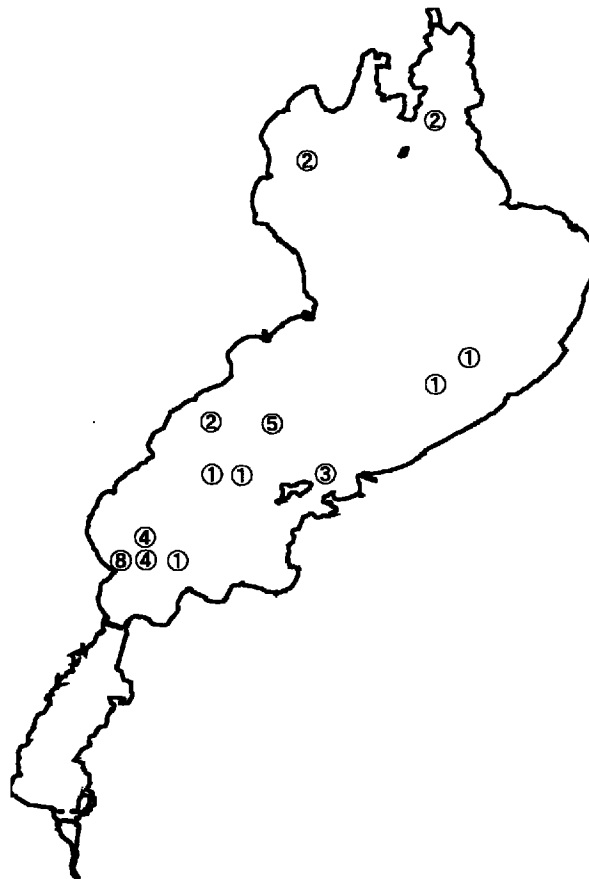


図1 沖曳網調査による標識魚再捕場所  
(○の中の数字は再捕尾数)